様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１７３０３９８

研究課題名（和文）戦争体験の共有と継承に関する調査研究

研究課題名（英文）Research and study on the succession and sharing of the war memories in contemporary Japan

研究代表者
野上　元（NOGAMI, Gen）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：５０３５０１８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：　戦争体験者が次々と亡くなってゆく現在において、本研究課題では、戦争体験の共有と継承の現状を実地調査および文献調査によって明らかにしようとした。特に、共有や継承の重要な地点である各種図書館・文書館、戦争･平和記念館における様々な試みに注目したほか、それらをまちづくりや観光に活かす試みにも注目した。
　一方、2011年3月12日に調査予定地域で発生した大地震（いわゆる長野県北部地震・栄村大震災）のため、戦争体験者への継続的な聞き取り調査については断念せざるを得ない部分があった。また、理論的には、そうした共有と継承とも関連して、戦争と社会の関連を様々な視点から検討する戦争社会学の分野形成を模索した。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to clear the situation on the succession and sharing of the war memories in contemporary Japan. For this purpose, in particular, some activities of public and private libraries and museums on war and peace are investigated. And this study approaches the community developments in which the residents are using war memories as their regional identification.
On the other hand, the successive interviews to the war experienced people, which were planned for one of the most important parts of this study, are stopped because of the outbreak of North Nagano Earthquake at March 12, 2011. During the term of this project, I participate in the foundation of sociological association on war, which is first established in Japan.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学、社会学

キーワード：戦争の記憶　戦争体験　戦争社会学　歴史意識

１．研究開始当初の背景

申請者は「戦時動員」および「戦争体験」、そしてそれらから構成される「戦争の記憶」を対象として、近現代日本における「戦争」についての歴史社会学的研究を進めてきた。そこには以下のような問題意識と研究状況があった。

(1)すでに人生の晩期にいる戦争体験者から貴重な証言を聞く機会は日々失われており、社会(学)的な課題として、これらを収集する作業は中断を許さない状況にあった。そこで申請者は 1996 年より、長野県下水内郡栄村での「戦争体験」の聞き取り調査を、いわば定点観測として行ってきた。

(2)もちろん、聞き取りに基づく「戦争体験」研究・「戦争の記憶」研究じたいは、近年の学会での諸報告や発表論文などをみても、むしろ盛んになってきている。この研究領域の重要性が広く認知された証左だと考えられる一方で、10 年以上前からこの課題に取り組んでいる眼からすると、それら近年の諸研究は、「戦時動員」研究やその背景となっていた「近代化論」や「社会変動論」との理論的なつながりを失ってしまっており、「戦争をめぐる歴史社会学的な研究」としては、ややテーマ設定が狭い。それらの豊かな蓄積を、「戦争体験」の聞き取りに基づいた「戦争の記憶」研究に接続し、「戦争」をめぐる社会学的な課題を洗い直す必要がある。

(3)また、冷戦が終わり「テロとの戦争」が始まるというように、「戦争」のありよう自体が変容しつつある現在、「戦争についての社会学的研究」の理論構成を、「戦時動員」「戦争体験」「戦争の記憶」研究の諸成果に基づきながら再検討することも非常に重要な課題である。

(4)同時に、「戦争体験」の聞き取り調査が盛んに行われ始めたという一方で、大量に遺された「戦争体験記」の流通・収蔵に関する調査研究が（特に社会学的な見地からは）ほとんどなされていないという現状がある。高橋三郎による『「戦記もの」を読む』（1988 年）はその先駆的な業績であるが、それに続く調査・研究が乏しい。申請者が、「戦争体験記」の執筆者たちを対象に、その「執筆体験」を聞くというインタビュー（＝いかなる思いが戦争体験記に込められたのかということ）を試みてきたのも、そのような問題意識からであった。「戦争体験を書くこと」をめぐる歴史社会学的な考察は、とりあえず、申請者の初の単著である『戦争体験の社会学－「兵士」という文体』（2006 年）にまとめることができた。

(5)ただしそれは、量的な調査あるいは俯瞰的な実態調査に基づいたものではなく、言説としての起源や流通や参照関係などを分析する、いわば「系譜学」的手法によるものであり、前著上梓後は常に、そうした調査研究の必要性が申請者の頭の中にあった。また、このテーマについて、いくつかの市民講座で講演をする機会が与えられ、その重要性を再認識するとともに、「戦争体験記」を今後いかに「読み」そして「共有する」のかという課題の存在を逆に教えられることがあった。特にその一つに、自費出版を取り扱う小規模出版社の相互連絡を旨とする NPO 法人「自費出版ネットワーク」主催の市民講座がある。講座の参加者たちである中小出版社の社主たちは、戦争体験記をめぐる、膨大な自費出版書の書き手たちの思いを受け止める立場にあるために、いかにそれを後代へと継承されるべき社会的な財産として共有してゆくべきかという課題に極めて敏感であった。講演終了後も交流が続き、自費出版物の流通や保存に関する学術的な調査の必要性やデータベースの作成の検討について意見を交換しあうことがあり、これが本研究計画の着想の原点の一つとなっている。

２．研究の目的

(1)なによりも「定点観測」として、可能な限り聞き取りを継続することが何よりも必要である。もちろん調査の継続自体が重要な目的であるという以上に、①ライフヒストリー／ライフコース論的な視点によって、晩年において人が自らの人生を意味づけるさいに戦争の体験は語りにいかなる作用をもたらすのかということ、②もし体験者本人が死去されている場合でも、可能であればご家族や親戚に聞き取りをお願いし、その体験が親密な圏域においてどのように共有されていたのかということ（参考：北村毅「戦争体験をめぐる元兵士と家族の戦後誌―家族のナラティヴとして〈戦争〉を聞き取る」）、③地域社会における「戦争の記憶」を基盤としていた紐帯の消失の影響（老人会での話題の変化や遺族会の変容）など、まさに現在しかできない研究として、基礎的なデータ収集と理論的な考察を平行させる必要がある。

(2)また、基礎的な作業として、膨大に書かれた戦争体験記の流通・所蔵についての情報を整理する必要がある。各地の戦争・平和博物館や自治体図書館に対して郵送調査や訪問調査を行い、統一的な視点で調査することによって、その全体像が徐々に明らかになるだろう。こうした基礎的な作業じたいが、意外と手を付けられてはおらず、得るものが多いはずである。また、自費出版社主たちとの交流でできたネットワークは、データ収集においてはもちろんのこと、研究成果の発信についても、この研究計画において重要な可能性をもたらすものと予想された。

３．研究の方法

(1)本研究計画の学術的な特色はまず第一に、10 年以上にわたる「戦争体験」の継続的な聞き取り調査という点にある。戦争体験の聞き取りはますます困難になってきているが、申請者は、そうした研究上の制約条件を、一貫して、逆に「戦争の記憶の現在性」の問題としてテーマ化しようとする。「戦時動員」論との接続や現代の「戦争」の変容という視点は、そうした問題意識の社会学的な意義を測定し、理論的な奥行きを求めるために必要とされている。

(2)これと連動し、「戦争体験記の社会学的な調査・研究」を行う。そこでは、社会学の方法に、メディア史的な視点を組み込むことが肝要である。

(3)同時にこれまで培ってきた研究成果や様々な研究資源をこの段階で整理し、当該分野全体の発展の一翼を担い、「戦争」の社会学的探究の可能性それ自体を模索するとともに、社会学以外の社会諸科学における研究（例えば平和学）との接続可能性を模索し、「戦争体験」という知的財産を現代社会において共有する方法を模索してゆきたいと考えている。

４．研究成果

(1)「戦争社会学」の試み

論文「戦争とメディア（１）――メディア論講義ノートから」(『社会学ジャーナル』33 号）において、各種の情報メディアとの絡みで、第二次世界大戦以降の総力戦（冷戦）における「戦争体験」を考える理論的手がかりが得られた。

「戦争社会学」に関しては、福間良明と共に『戦争社会学ブックガイド』を編集し刊行した。40 人以上の執筆者の協力をえることができ、社会学的な知見と戦争研究・戦争体験研究の交錯を浮かび上がらせることができた。これに関連し、戦争社会学研究会第三回研究大会においてシンポジウム「『戦争』研究の視角――社会学と歴史学の交差」やワークショップ「戦争社会学をいかに構想するか～『戦争社会学ブックガイド』をめぐって」、第四回研究大会において「軍事社会史・軍事社会学と戦争社会学――「軍事」領域の社会学的重要性」と題されたシンポジウムを企画・司会し、「戦争体験の共有と継承」という本研究計画と「戦争社会学」「軍事社会学」との関連性を多角的に検討する機会を得た。それらは、ヨーロッパ近世史・近代史との比較や、アメリカを中心に進む軍事領域への社会学的アプローチである。これらは本研究計画の遂行における重要な成果だと言えるだろう。

『現代社会学事典』への項目執筆もあった。「戦争体験」「戦争責任」「総力戦体制論」「歴史修正主義」など、本研究計画に関係が深いものであり、その成果を共有可能なかたちでまとめる良い機会となった。いくつかの学会報告とも併せ、本研究計画を更に広い「戦争社会学」という分野に文脈的に接続してゆくきっかけとなった。

その更なる成果として、共編著として、福間良明・蘭信三・石原俊と共に『戦争社会学の構想』の編者となった。研究課題の最終年度に刊行されたこの書物は、若手からベテランまで 18 人の執筆者が集まった、現時点での戦争に関する社会学的研究の最前線を表すものであり、本研究計画の課題と密接な関係を有している。先に挙げたシンポジウムの企画が研究書として結実したものであるが、加えて本書全体の監修、高橋三郎論文の「解説」、および「消費社会の記述と冷戦の修辞」の章を執筆した。ともに第二次世界大戦、アジア太平洋戦争といった「戦争」をより広い分野のなかで位置づけてゆく「戦争社会学」の試みとの関連において重要な作業となった。

(2)方法論の整備の試み

日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』（弘文堂、2010 年 7 月刊）に項目「考古学と系譜学」を執筆し、あるいは小林多寿子編『ライフストーリー・ガイドブック』（嵯峨野書院、2010 年 8 月刊）でカルロ・ギンズブルク『チーズとうじ虫』、保苅実『ラディカルオーラルヒストリー』の両研究書を解説した。両者とも、「戦争体験」という対象への言及はないものの、オーラルヒストリーや文書資料へのアプローチについて検討しており、歴史社会学的な方法や記述、課題について述べている。これらは、本研究課題のおいて重要な意味を持っている。

このほか、北海道大学アイヌ・先住民研究センター主催の座談会「保苅実の歴史学をいかに受けつぐのか？」で登壇した。オーラルヒストリーと歴史の関係について、社会学の立場から言及し、これも本研究計画における方法の問題として重要なものとなった。

論文「歴史に向き合う社会学－資料と記述をめぐる多様なアプローチにみる可能性」（『年報社会学論集』22 号）は、これら方法をめぐる大きな問題を考えるきっかけにもなった。

戦争体験が「方法」との照らし合わせてどのような可能性を持っているかについては、藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』に「戦争体験の社会史」を執筆した。本研究計画の遂行にとって重要な整理の機会となった。

(3)戦後意識・戦後史と戦争体験

日本マス・コミュニケーション学会の大会シンポジウムに登壇することで、それをもとに特に日本社会という文脈について考える機会を与えられ、「戦後史」（の終わり）をテーマにした論文「「戦後」意識と「昭和」の歴史化」(『マス・コミュニケーション研究』

76 号）を執筆した。
　甲南大学人間科学研究所で企画されたシンポジウム「心の危機と臨床の知－戦争体験の記憶と語り」で指定討論者として、同研究所「加害－被害関係の多角的研究」研究会では報告者として、それぞれ戦争体験や戦争の記憶の研究をめぐって浮かび上がってきた様々な現代的な問題について（特に前者では一般市民も聴衆にまざりながら）報告した。この記録は校正を経て『心の危機と臨床の知』11 号（甲南大学人間科学研究所紀要）に掲載された。
　韓国の壇国大学日本研究所での学術シンポジウム「韓日大衆文化と戦争表象」において、報告「戦争体験と近現代日本社会」を行った。研究代表者にとって、海外での初めての研究発表であり、現地の日本研究者との応答も含め、全く違った戦争体験を持つ人々を前にしての報告は、本研究課題にとって有意義な機会となった。本報告を元にした論文が『日本学研究』（壇国大学日本研究所紀要）に掲載された。

(4)各自治体図書館、戦争･平和博物館における戦争体験記、戦記ものの収蔵調査
　「戦争体験文庫」を設置し、精力的に全国から戦争体験記や各種の記録･文献を収集している奈良県立図書情報館を訪問し、文献調査を行ったとともに、スタッフの方２名にインタビューをすることで、自費出版も含めた戦争体験記・自分史などの置かれている状況を、図書館･文書館側の立場から明らかにすることができた。
　奈良県立図書情報館の戦争体験文庫に聞き取り調査・文献調査を再び行い、公立図書館における戦争体験記（私家版を多く含む）や戦記物の取り扱いにつき、資料や証言をえた。
　その他、ピースおおさかを訪問し非常勤職員に戦争関係の展示をめぐる状況や関係資料の収集や所蔵状況、ピースおおさかをめぐる諸状況に関するインタビューを行ったほか、外務省外交資料館、防衛省市ヶ谷台、東京大学附属図書館（総合図書館、情報学環附属図書館）、大宅壮一文庫や早稲田大学図書館・司馬遼太郎記念館等を訪問し、戦争や戦争体験、戦争の記憶に関する見学や資料調査、現代の日本社会における戦争体験や戦争の記憶に関する諸問題について、同館関係者に聞き取り調査を行った。
　ここで示唆されたことを踏まえ、全国の公立図書館に対して、戦争体験記の収蔵調査を行う予定であり、その準備に着手している。この成果はまだ論文としてまとまってはいないが、追加調査も踏まえて、早めに公表する予定である。

(5)また、愛媛県松山市の「坂の上の雲」まちづくりの試みについては、「地域社会と戦争の記憶」（野上 2008）における「地域」という枠組みを活かし、「日露戦争の記憶」と「アジア太平洋戦争の記憶」の対比という視点から調査を進めた。

(6)関連する研究への書評
　当該研究期間内に、関連する研究業績への書評の仕事を数多くこなした。
　全体の研究動向を示すものとして、『社会学評論』に、「テーマ別研究動向（戦争･記憶･メディア）」を執筆した。
　『日本歴史』（吉川弘文館）に載せた書評としては、成田龍一『「戦争経験」の戦後史』、吉田裕『兵士たちの戦後史』があり、『図書新聞』に載せた書評としては、川村邦光『写真で読むニッポンの光景１００』、高井昌史編『「反戦」と「好戦」のポピュラー･カルチャー』、島村恭則編『引揚者の戦後』、『ソシオロジ』に載せた書評論文としては、山本昭宏著『核エネルギー言説の戦後史 1945－1960：「被爆の記憶」と「原子力の夢」』がある。
　いずれも本研究計画の内容やその遂行に密接な関係を持つものであり、戦争・戦争体験を日本社会で考え続けることの意義や価値を一般の読者に伝えた。

　研究代表者は本研究期間中に、育児休業（平成 22 年 10 月１日～平成 23 年 3 月 31 日）を取得し、研究計画を中断させた。
　また、調査地の一つである長野県下水内郡栄村は、東日本大震災の翌日である 2011 年 3 月 12 日に大地震に見舞われ、今なお避難所生活を余儀なくされている方も多くいる。地域のインフラだけでなく、コミュニティも破壊されてしまった。此の地での継続的な調査を一部困難なものにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４　件）
① 野上元「テーマ別研究動向（戦争･記憶･メディア）－課題設定の時代被拘束性を越えられるか？」『社会学評論』（日本社会学会）62 巻 2 号、依頼原稿（査読無）、2011 年、p236-246
② 野上元「「戦後」意識と「昭和」の歴史化」『マス･コミュニケーション研究』（日本マス･コミュニケーション学会）、76 号、依頼原稿（査読無）、2010 年、p105-116
③ 野上元「歴史に向き合う社会学－資料と記述をめぐる多様なアプローチにみる可能性」『年報社会学論集』（関東社会学会）、22 号、依頼原稿（査読無）、2009 年、p1-9
④ 野上元「戦争とメディア（１）」『社会学ジャーナル』（筑波大学社会学研究室）33 号、査読無、2009 年、p93-105

〔学会発表〕（計５　件）

① 野上元「社会学の研究対象としての「戦争」－その多様なアプローチ」日本大学社会学会招待講演、2013 年 11 月 27 日（日本大学文理学部）
② 野上元「消費社会の記述と冷戦の修辞」第 85 回日本社会学会大会、2012 年 10 月 4 日（札幌学院大学）
③ 野上元「『戦争社会学』とメディア史研究」日本マスコミュニケーション学会第 33 期第 6 回研究会、2012 年 5 月 12 日（同志社大学）
④ 野上元「戦争体験と近現代日本社会」檀國大學（韓国）日本研究所第 26 回学術シンポジウム「韓日大衆文化と戦争表象」2010 年 4 月 23 日（韓国・檀國大學）
⑤ 野上元「「昭和」の記憶と世論／輿論」日本マス・コミュニケーション学会大会シンポジウム、2009 年 6 月 6 日（立命館大学）

〔図書〕（計３　件）

① 福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編著『戦争社会学の構想』勉誠出版、2013 年、450 頁
② 野上元・福間良明編『戦争社会学ブックガイド』創元社、2012 年、320 頁
③ 藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』弘文堂、2011 年、288 頁（野上元「戦争体験の社会史」p196-209）

６．研究組織

(1)研究代表者

野上　元（NOGAMI, Gen）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：５０３５０１８７